
神なんて嫌いだ。

まりも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神なんて嫌いだ。

【Nコード】

N3550W

【作者名】

まりも

【あらすじ】

俺は神が嫌いだ。

いつか神をコロシタイ。そう思っていた。

だが、分かっていた。神など存在しないことを。

だが、その見解を突然現れた一人の少女が壊した。

これは、その男が少女と共に神を殺す物語。

プロローグ（前書き）

ちよつとくらい話を作つてみたくて作りました。

プロローグ

【神】あなたはこの存在をどう思っているだろうか。
神聖であり、偉大な者？創造主？全ての始まり？

【神】をどう思うか。それは人それぞれだろう。
その神をどう思うかなんて、地域や国によっても変わってくる。
その中には、神が人間を創った。などというのも存在するかもしれない。

いや、そういう物の方が多いかもしれない。

まあ、神をどう思い、どう扱うかなど、一人一人多少は違ってくるだろう。

俺は、神を憎いと思う。人間などというものを創った神が。

まあ、それは本当に神がいればの話。そんなはずなどない。
だが、もし神に出会うことが出来たのならば、俺は間違いなくそいつを殺すだろう。

それほどまでに、俺は、神という物が憎い。
神を主とし、崇拝する宗教などは、壊滅すればいいとさえ思っている。

神は、人間。つまり俺たちを創った。
ただ、それだけだ。だが、俺はもう人間として生きるのが嫌だ。
人間なんて、ただ、臓器の機能によって動いているだけの物。
虫や獣と大差はない。

脳で考え、体を動かす。そんな当たり前のことも、考えてみると、
ロボットとも大差はない。

人間なんてものは、自ら望んで生まれてくるものでもない。

言ってみれば、無理やり創られ、世界に放り出されるようなもの。魂だのなんだの言っではいるが、どうせ、意識だって脳で考えているだけ。

つまり、今俺たちが意識だと思っているものも、脳の機能でしかない。

ただ、その生み出された世界で死ぬまで。脳の活動が止まるまで、人間は物を考える。

また、人間もロボットと大差はないんだと思う。

ただ、知能で考え、それを体の各部位に伝え、体を動かす。それだけだ。

それに、人間なんて俺はなりたくなかった。

人間は、ただ一つ。一生のうちに、生きるという苦しい仕事を強いられる。

そして、一生その仕事に苦しみ、死んでいくだけだ。

趣味などは、在ったとしてもいずれ飽きる。

人間は、よく生きて100年の命。

俺は、どうせ生まれるのなら、花や、虫に生まれたかった。

人間などに生まれてしまったから、何十年もの間、苦しみを背負わなければならない。

生きるということは苦痛だ。どうせ死ぬと分かっているのにそのときを生きるために動かねばならない。

楽しいことがあったとしても、苦痛が消えるわけでもない。

むしろ、苦痛が増えていくだけだ。

こんな楽しい時間をいつまでも過ごしたい・・・と。

そう思った所で、どうせ未来の運命は死だ。

そう、俺の運命などもう決まっている。どうせ死だ。後世に名前を残そうとも、そんなことが出来るのは類まれなる才能を持つ人物のみ。

俺は、この運命に絶望し、何度も自殺しようとした。だが、それを俺の中の恐怖という枷が邪魔をする。

何度も死ねたらどんなに楽か……。と考えた。

答えはものすごく楽なんだろう。

そうたどり着いた。

しかし死ねない。苦痛に耐えて、天寿を全うするまで逃れられない生きるという名の地獄。

次第に、俺の中で居もしない神に対する怒りがつのっていった。なぜ俺を創ったのか。と。なぜ、俺の願いを聞き、殺してくれないのか。と。

なぜ、このような苦痛を味わわせるのか。と。

いつか、俺は実行したい。

神を殺したい。

一人でもいい。とにかく、俺を創った神を殺したい。

俺の苦痛の何倍もの苦痛を与えて。

長い長い時間をかけて……。ゆっくりと、じっくりと……。

手足をもぎ、斬りつけ、皮をはがし、その血肉で、豪華なディナーを作り、堪能したい。

神を……。コロシタイ。コロシタイコロシタイコロシタイッ！

その血肉で！泣き叫び許しを請う声で！その首で！

豪華なディナーを飾りたい。

勝利の宴を、神の血で彩りたい。

もし本当に神が存在し、神を殺すと世界が崩壊するとしても、それでいい。

神を殺すことが出来るのならばそれでいい。

俺に、生きるという名の拷問を続ける神など、消えてなくなればいいんだ。

俺は、そのために訓練をした。

世界中の銃の使い方を学んだ。

世界中の武術の達人の高速移動術を学び、人間離れた早さ。瞬動の域までに達した。

そしてその武術の達人にそれぞれ得意とする武術を学んだ。

それこそ、拳法や、物の投擲など様々な物だ。

神などいない。それは分かっていた。

けど、こうして神を殺すという面目で訓練をしていないと、精神が崩壊してしまいそうだった。

別にそれでもよかったのだが、それだと更なる生き地獄を見てしまう。それだけは嫌だった。

しかし、それを極めた今となってはもう現実を見るしかない。

神など、いないのだから。

そう。神などという存在などいない。

いない・・・はずだった。

プロローグ（後書き）

うん、ちょっとグロテスクな表現がありましたね。
こついった描写が無理な方は即座にバックをお勧めします。

靈力に神力。神は存在する。
(前書き)

急展開過ぎるというか・・・。
説明不足というか・・・。

靈力に神力。神は存在する。

神なんていない。そんなこと最初から分かっていた。
最近、ついそんなことを考えてしまう。

今、俺がしているのは裏山での瞬動の訓練。

・・・こんなことはしても無駄だということは分かっている。

仮に神がいたとしても、人間の銃弾など、簡単に避けられてしまう
だろう。

たとえ、当たれば致命傷になったとしても、容易にかわされるであ
ろう。

瞬動だって、神にとっては当たり前なのかもしれない。

だが、やらないよりはやっておいたほうがいい。

少しでも、神を殺せる可能性があるのなら、その可能性をあげるこ
とこそが、今現在できることだ。

しかし、神などいない。

居たとしても、ただの人間である俺が、会えるわけもない。

「ふう。」

今日の訓練を終え、帰路につく。

帰路は下り坂なので、あまり疲れない。

もちろん帰路も瞬動で移動だが。

「ん？」

いま、何かが見えた。

帰路の途中の草むらに、大きい何かが……。野犬や猪なら狩ろう。今日の夕食にする。

えっと、確かこの辺り……。これは！？

「う……。ううう。」

そこには日本人離れた綺麗な白い髪の少女が居た。

「おい、大丈夫か？」

「う……。？」

大丈夫そうにないな。どうする？家に連れて帰るか？

別にかまわないが、俺の家には神に対する罵詈雑言が所狭しと書いてある。

まあ、見られたからってまずいものでもないしいか。

明日になったら親も見つかるだろう。

それまでの面倒なら俺一人でも大丈夫だよな。

倒れていた少女は、高熱に、怪我。さらにやけどと見られる痕が複

数あった。

何をしたらこうなるんだろうか？

家が火事になったとか？

いや、それはない。ここ最近そういうことは聞かない。

つまりこの少女自身に聞くしかないって事。
ま、正直どうでもいいんだけどな。
ちょっとした好奇心ってやつ。

「う・・・ん？」

眼が覚めたかな。

「大人しくしてろ。熱があるんだ。」

39度な。

「これくらい・・・平気。」

どこが平気なんだよ。そんな体で。

「霊力の回復を確認。霊力の全てを回復へ。」

んあ？霊力？何だそりや・・・ってなんだ！？
傷が・・・消えていく？やけどの痕も消えている。
どう言う事だ？

「おまえ、名前は？」

少し警戒し、ハンドガンを手にもって話しかける。

「・・・リオン。」

リオン・・・ね。

「じゃあついでにもう少し質問に答えてくれ。なぜ、山の中で倒れていた？」

「・・・」

「どうした？言えない事情でもあるのか？それなら別に・・・」

「・・・神に・・・」

え？神？また嫌な言葉を。

「神に・・・やられた。」

神にやられた？確かにそういったんだよなこいつ。本当なら・・・。

・・・いや、きつとこの子は何処かの宗教の信者なんだろう。

自分が何らかの悪事を働いたせいで天罰が下った。

そういう思い込みだろう。

「はいはい。神様に天罰でも下されたとか？」

「いや、ちがう。」

??じゃあなんなんだ？

「私は神を殺しにいき、返り討ちにあつたんだ。」

神に返り討ち・・・？神・・・神だと！？

バンッ

「ふざけるな！神なんてものがあるなら、その証拠を見せる！」

神なんてものが本当にいるのならば・・・いや、そんなものはいない。分かりきっているじゃないか。

「・・・わかった。」

わかった！？どうやって証明するつもりなんだ？

「見て。」

ブウン

なっ！？これは・・・火の玉？

「この力は霊力。生物が死んで、霊になって始めて使える力。」

れ、霊力？幽霊の力か！？

「でも！それならお前は何で使えるんだ？お前は生きてるじゃないか。」

「私は、一度だけ死んでる。」

「は？」

「今の私は、一度死んでいる。死んで霊体になった私の霊をもう一度体に埋め込むことで、霊力を使えるものとして受肉した。」

「どういうことだ？つまり、幽霊になってからまた生き返ったってことか？」

「なるほど。まあ日本でも陰陽師とか聞くし、無理な話でないのかもしれない。」

「話をもどす。この霊力は、他の力にない特殊な性質を持っている。」

「

「と、特殊な性質？」

「ああもう！やっと話についていけると思ったらまたややこしいことを！」

「そう。この霊力こそが、唯一、神の持つ神力に対抗できるの。」

「神力？」

「そう。全ての神がもつ力。力の類ではおそらく……いえ、確実に一番の力がある。」

「なるほど。それに抵抗できるわけか……ってなに納得してんだ俺？」

「魔力や気。はたまた念力でさえもこの力には無力。それほど神力とは強力なの。」

それで、それに抵抗できうる力を持つのが、霊力。」

そういうことね。大分ファンタジーになってきた。

「でも、それだけじゃ神がいる証拠にはならないぞ。」

「大丈夫。これから見せる。」

リオンは手に霊力の弾……火の玉（仮）を作り大量に空に飛ばす。

それを花火でも見るように見上げていると、どこからともなく、

リオンのものと同じぐらいの球体が飛んできて火の玉（仮）を打ち落としていく。

「……あれが神の力。神力の攻撃。」

今のは様子見程度だったけど本気で行くとこの街は消し飛ぶ。

神は下界……つまり人間が住む世界を壊すことは出来ないからでもそれはこっちも同じ。こっちからの攻撃じゃ下級の神に傷が少し付く程度の攻撃しか出来ない。

だから神と戦うには天界……つまり神がすむ世界に行かなければならない。

天界は神力によって空間から隔離されている空間。普通の人間じや見ることも入ることも出来ない。

でも、霊力を使えるものなら、天界に入ることが出来る。」

「霊力が神力に対抗し得る力だから？」

「そう。霊力と神力はどちらも同じぐらい万能。どちらが強いともいえない。」

使い手や、使い方。どういう用途に使うかによって変わる。

つまり、神力と霊力は全く互角。そして、傷の回復。物質の強化。その他諸々。

魔力に近いものではあるけど魔力なんかとは強さが桁違いに違う。

「

「でもさ、それなら両方使える奴がいたら最強なんじゃないか？」

リオンは首を横に振る。

「神力は、人間には使えない。神力は唯一神のみ使える力。」

逆に、霊力は人間のみ。神には使えない。」

「何で使えないんだ？神力は分かるけど霊力は神なら使えそうな気もするが。」

「一応理由はある。人間が神力を使えないのは神力は位が高すぎて人間をはるかに凌駕しているから。逆に、霊力の場合、神が使うにも一回死ぬ必要がある。でも、神の体は位が高すぎて、

幽霊なんていう妖怪・・・つまり化け物はその体に入ることは出来ない。」

「・・・私も神と戦いに行ったとき、霊力で魂に直接攻撃しようと思ったら、弾き出された。」

そしてその隙をつかれ、下界の町に落とされた。」

なるほど。でもきになることが。

「なあ、じゃあ何で山で倒れて居たんだ？怪我くらい自分で治せるんだろ。」

「・・・霊力をすごく消費してて、食料を探して山に入ったときに霊力が切れた。」

そのせいで怪我也治せなかった。怪我は治したかったけど、直したら霊力が全部なくなる。

だから霊力を出来るだけ使わなかった。今まで生きていたのはそのおかげ。」

「神との戦いで霊力を？」

「・・・（コク）」

なるほど・・・。

「つまり、今までの言動から考えると、お前は神と敵対する立場にある・・・。それでいいな。」

「（コク）」

俺は銃を下げる。

そうか。本当に神なんていたんだな。感激だよ。

「なありオン。初対面でいきなり悪いが、頼みがあるんだ。」

俺の部屋。

そこに俺とリオンは向かい合って座る。

神への罵詈雑言に囲まれて。

「ホントにやるの？」

「ああ、俺はこのときのためだけに生きていたようなものだから。」

そう、俺が今リオンに頼んでいるのは俺を殺すこと。

俺を殺して、リオンと同じ状態にして欲しいと頼んだ。

霊力というものが在れば、俺が神を殺す確立が一気に跳ね上がる。
鉄砲がある。おそらくただの銃弾程度なら神力で阻まれてしまうだろう。

だが、それが霊力で何らかの処置を施したものだっただら？

弾に細工を施し、神にも効く銃が出来る。

それを使えば、神をも殺すことが出来る。

俺の悲願を達成することが出来る。

しかし、霊力とは言っても、妖怪を操ったりは出来ないようだ。

主な用途としては物質の強化。身体強化。

傷の回復や先ほどリオンが作った火の玉のようなものも作れるそう
だ。

ちなみに靈力をフルに使えば町一つ壊滅させるくらいはできるらし
いんだけど、俺には無理らしい。

そんな馬鹿げた威力の攻撃はリオンの家の家系の者しかできないそ
うだ。

何でも最初に靈力が開花した家系だとか。

俺にできるのは最初に言っただけらしい。

そして、リオンと俺の目的は同じ。神を殺すこと。

リオンは理由は話してくれなかったけどそれは追々聞くことにする。

ここで言うておくがもう既にリオンとは契約済みだ。

契約内容は神を殺し尽くすまでの同盟。

まあ、元々敵じゃないけどな。

今思えば今ものすごく運がいいんだ。

だってそうだ。かなうはずのない夢がかなうかもしれないんだから。

まあ、そんな華やかな夢じゃないけどね。

まあ、その一步目として一回死ななければならぬんだ。

「頼む・・・リオン。」

「わかった。」

リオンは懷から儀式用（？）の短剣を取り出す。

赤や緑の裝飾のある剣だ。

そしてそれを・・・俺の左胸に刺した。

ズブリ

嫌な音がやけに明確に聞こえると共に、左胸に激痛が走る。

「う・・・グ・・・アア・・・。」

いてえなあ。まあ、これも悲願のため。甘んじて受けるさ。

そういえば、リオンもこんな痛み・・・味わったのか・・・な？

俺の意識は、闇に沈んだ。

靈力に神力。神は存在する。(後書き)

短いし。

駄文だし・・・。

夢と目覚めと霊力。(前書き)

遅くなった・・・。

何回も書き直した・・・。

しかしそれでもこの程度・・・。

これが俺の限界か・・・。

夢と目覚めと靈力。

夢を見た。

深い森の中。ひっそりと存在する広大な邸。

その邸の前にある薄汚れた表札には『ルーネリア』の文字がある。
常に物静かでありそうなこの邸。しかし、このときは違っていた。

夜の森で赤く燃える邸。

邸に攻撃を仕掛ける十数人の集団。

そしてそれを指揮する見た目25歳位の青年。

そしてその攻撃を青白い何かの壁で防ぎ、あるときは反撃する二人の男。

その集団の攻撃も、二人の男の攻撃も、一つ一つに邸の大半を吹き飛ばすほどの威力があった。

そんな戦いの戦場となっているのだ、邸はもう原形も残していない。

鉄で作られた数本の柱が立つのみだ。

その男たちは強かった。しかし段々と数の暴力にさらされ、少しずつだが劣勢となってゆく。

そしてついに邸の一番奥にまで男たちは追い詰められる。

そこには幼い白い髪の女の子と、白い髪の女性が居た。

女性は、子供に逃げるよう言い、自身も男たちに加わって戦った。

女性も強かった。女性が加わったことにより、劣勢は優勢へと変化する。

もう少しで相手も引いてくれるだろう・・・そう思うほどに優位に立っていた。

しかし。その優勢も十分と持たなかった。

指揮官の青年。それが出てきた。

ただの指揮官ならば何の力にもなりはしなかっただろう。

しかし、この青年は別格だった。

男の一人が剣を持って青年に切りかかる。

その剣が青年に届く・・・その瞬間は訪れなかった。

剣が届く前に、男の首は、青年の手に握られていた。

もう一人の男は、一瞬怯みはしたが腰の剣に手をかけた・・・はずだった。

その手が触れたものは、剣の柄ではなく地面に落ちているただの石だった。

そのとき男は自分の手が切断されていることに気づく。

しかしそれに気づいたときには、自身の首も切り落とされていた。

その光景を目の当たりにし、女性は恐怖に震える。

恐怖に竦む足を懸命に動かしながら、先に逃がした娘の元へと向かう。

娘は案外近くに居た。

母の姿を確認し、笑顔で母の元へと走ってゆく。

少女が母の腕の中へと飛び込む瞬間、母の体は、横一文字に両断されていた。

少女の飛び込んだ物は、先ほどまで生きていた、母の下半身だった。少女にはまだ何が起こったか分からず、二度三度と母の上半身と下半身を見直して、

やっと真実にたどり着いた。

母は、殺されたのだ・・・と。

両断された箇所から血と臓物が溢れ出てくるのを半ば放心しながら見る。

母の体はまだビクビクと動いている。しかし生きてはいない。

幼いが、頭のいい少女にはそれがすぐ分かった。

やがて少しずつ母の敵が近づいてくる。

少女の頭の中には自分ももう殺されるんだ・・・その言葉しかなかった。

母も殺された。おそらく父や兄も殺されているだろう。

もう殺されるならそれでよかった。父や母の元にいけるのだから。

母親を殺した指揮官の青年は少女を見下し、その絶望にゆがんだ目を見る。

そして口元を吊り上げにやりと笑うと、少女を殺さず、後ろで待機している仲間の元へと向かう。

少女はこのとき自分が助かったのだと理解した。

なぜ助かったのか？そんな考えは浮かんでこなかった。ただ浮かんできたのは憎しみの感情。

同時に復讐してやるとも誓った。

自分を生かせておいたことを後悔させてやる・・・と。

必ず母や父を殺したようにお前も殺す・・・そう誓った。

そして青年の背中をにらむ。青年は仲間の元にたどり着き、何かの話をしている。

そして、そのときに聞こえた青年の名前を少女は心に刻み付けた。

必ず・・・必ず殺す対象として。

母や、父、兄の命を奪った張本人。

その後将来忘れることも無い、その青年の名前は・・・。

クリエイター
【造物主】

「っは!？」

今は・・・夢？

ずいぶんとグロテスクな夢だったが・・・。

なぜかただの夢とは思えないんだよなあ。

それにあの少女は・・・リオンに似てたよな・・・？

それに造物主^{クリエイター}って・・・すごく物騒なやつが・・・。

まあいいか。後で分かるだろう。

・・・で、今現在問題なのは俺のからだの周りにある青白いものだ。

これが霊力ってやつなのかな？ハア、ほんとにあったんだ、こんなもの。

それは俺の胸・・・鳩尾の辺りから少しづつ湧き出ている感じた。

湧き出てからゆっくりと俺の体を覆い、少しづつ体から離れる。その繰り返しだ。

で、こんなものが見えるし生きてるってことは一応成功したってことか？

これで俺も晴れて妖怪ってか？

それにしても体がだるい。今何時だ？俺はどのくらい寝てた？

・・・四日間！？

嘘だろ・・・。仕事に行かないと・・・。ケータイケータイ。

【メールが六件あります。】

多いな・・・。まず一通目は・・・。

差出人：上司

遅いぞ！早く来い！今日は明日の取引の話をするはずだろう！

ああ、そんなこともあったっけな。

で、二通目は・・・。

差出人：上司

お前！結局来なかったじゃねえか！何考えてんだよまったく・・・。

ごめんな。しょうがなかったんだよ。

三通目・・・上司

遅いぞ！今日は取引だ！早く来ないと間に合わない！

四通目・・・やっぱり上司

バカヤロー！何で来ないんだ！俺一人で取引したんだぞ！
それと・・・明日も来なかったらクビにするって社長が・・・。

五通目・・・（ry

早く来い！後一時間で来なかったらクビにするって社長がもうかん
かんだぞ！

俺も何とか長引かせてみるが・・・。

六通（ry

残念だ・・・。お前はいい部下だったのに・・・。届け物なんて一
分でしてくるし・・・。

本当に残念だ。できればまた戻ってきてほしい。無理だとは思うが・

・。
・。

・。
・。
・。
・。

・。
・。

・。

・。

「ノオオオオオオオオオオオオ！」

ちくしょう・・・仕事が・・・。

まあ五年は暮らせるだけの貯金はあるが・・・。やっぱりなあ。

はあ、つらいよ「起きた？」何だリオン。

ちなみにリオンには俺の家の物は勝手に使って良いと言ってある。

「四日間しか眠っていない・・・。」

「いや、四日間も、の間違いだろ。」

「いや、しか。普通なら数ヶ月は眠るはず。目覚めるのが早いのは相性がいいからかもしれない。」

「相性？」

「そう。霊力というものはその名のとおり霊の力。そして、霊の殆どは悪霊や、怨霊。」

「なるほど。」

「それにもともと霊というものは恨みや未練によって出てくる。その殆どが憎しみや恨み。」

そして悪霊や怨霊の力はどれだけ恨みや憎しみが強いかに比例する。

私たちの霊力は悪霊や怨霊の力を使うようなもの。つまり、使用者が何か強い恨みを持っていたりすればその分威力も上がる。そして恨みや憎しみが多いほど霊力と共鳴し、引き合う。」

「つまり、俺の恨みや憎しみが強かったから相性がよかったと？」

「そう。相性がよければ霊力も増えるし、威力も上がる。」

「なるほど……。じゃ、後で使い方を教えてくれ。まずは朝飯だ。」

「うん。」

「さて、パンとスープでいいか？」

「だいじょうぶ。」

「そうか。」

さてと、レツクッキング！

女の子に食べてもらうのは初めてだから簡単な料理で。

スープは市販のインスタント。

パンは『もっちりぷよーん』が売り文句のプヨプヨパン。これが結構うまいんだ。

お湯を沸かすこと五分。お湯でスープを作りリオンに渡す。

特に何も言わずに食べてくれた。プヨプヨパンには少し困惑していたが。

さてと。俺は何食うかな？

パンはさっきので最後だから・・・スープだけで栄養摂取だな。

さてと、皆さんにレシピを公開しよう。

スープのもと一袋。

塩大さじいっぱい

砂糖大さじいっぱい

ビタミンCカプセル×3

鉄分カプセル×3

ごま油少々。

これで栄養は大丈夫！！・・・なはず。

味は・・・まあ飲めないことも無いな。リオンには飲ませないが。

ああ、これからどうなるんだろうか。

神と戦うといっても俺の修めたものが通用するか分からない。

ま、殺せるだけは殺すし、殺せなかったらまた策を練ればいい。

そのためにも、ちゃんと霊力を使いこなさないとな。

少ししたらリオンにいろいろ教えてもらおう。これからのために。

夢と目覚めと霊力。（後書き）

混沌スープ。試してみてはいかがですか？
たぶん天国が見れると思いますよ。
プヨプヨパン。自分は絶対食べたくないです。

霊力の使役。収束系と強化系。（前書き）

やばい。めっちゃ投稿遅れた・・・。

霊力の使役。収束系と強化系。

夜、家の庭にて、

「じゃあ、霊力の使い方を教える。」

「おう。どんと来い。」

よう。
阿断神哉^{あたちしんや}だ。え？誰だって？

俺はつい最近女の子を拾ってその子に殺された挙げ句に

ファンタジックな世界に足を踏み入れたただの一般人さ。

つまり今まで名前が分からなかった主人公さんだ。

ただ、名前に神の字があるのが不快だが。まあ、今は亡き親がくれた名前だから大切にしている。

そして今は、朝約束したとおりリオンに霊力の使い方について学んでいる。

場所は家の庭で時間は夜。家の庭は植木や花壇などのものが一切ないから思った以上に広く使える。

ちなみに、地面には砂利が敷いてある。

塀はかなり高めなので外から覗かれることはまずない。

まあ、隣の家の窓からなら見えると思うが、お隣は今外出中だ。

「霊力は、基本何もしなくても防御力を上げてくれる。たとえば、並みの包丁程度なら傷すらつかない。けど、切れ味のいい業物の刀とか、貫通力のある銃弾は防げない。あくまでその程度だから過度な期待はしてはいけない。けど、無いよりはあったほうが幾分かマシ。ちなみに、これは衝撃などにも反映されるから、高いところから飛び降りても足に負担が行かない様にする・・・ということも、霊力を使用すれば可能になる。」

なるほど。まあ、あまり強力ではないけど、体を保護してくれているようなものか。

それほど強力じゃないにしろ、これはかなり有難い事だ。

俺がいくら鍛えていたとしても、所詮人の身。高いところから飛べば恐怖もあるし衝撃もある。

高いところから飛ぶ場合、落ちたときの衝撃でかならず体は一瞬硬直する。

それは大きな隙だ。飛んだところを相手に確認されて居たら、落下地点も推測される。

そしてそこに攻撃を構えられたら完全に無防備となる。

しかし、この能力ならばそれを気にしない。落ちて、即行動できるというのはかなり有難い事だ。

まあ、靈力を使わなければそこまでは出来ないらしいが。

「それで、攻撃だけど、攻撃には二種類ある。」

「二種類？どんな攻撃だ？」

「まず一つは靈力を収束させて放つ攻撃方法。この前の靈力弾や、もっと大きくした物もある。」

靈力弾の場合、威力は小さいけれど速攻性と数量に長ける。大きいものはポンポンと使えるわけではないし、連射できず、隙も大きいけれど威力は絶大。」

「なるほど。一長一短。どちらを選んでもデメリットはついてくる・・・か。で、もう一つは？」

「もう一つは、物質に靈力をこめて強化して戦う方法。利点は自己強化が出来る点と、遠近。どちらで

も変わりなく戦えること。デメリットとしては、武器に頼る点や、自己強化しても本人に武術の心得がないと戦っても勝てる望みは薄い。それから大怪我をする機会が増える・・・そう言った所。でも、こちらは逆にバランスがいいから扱いやすい。」

「・・・リオンはどっちだ？」

「私は収束。魔力弾を大量展開して相手を疲弊させたところで大きな攻撃・・・私たちは収束砲と呼んでいる物を叩き込む基本的な戦い方。私としては神哉には強化を選んで欲しい。前衛を任せて後衛の私が収束砲を打つ機会を窺う・・・そういう戦い方が理想。」

なるほど。前衛に戦闘を任せて後衛が溜めの大きい大威力のものを

ぶつ放す……。そんな戦法か。

確かに合理的だ。じゃあそっちにしたほうがいいか。俺としても、接近戦の方が得意だし。

やはり確実な勝利を求めるのならこの方法が一番良いだろう。

大怪我をするって言うのはまあしょうがない事だしな。

どうせ後衛を選んで、前衛が居なくて攻撃がこちらに来るんだからどっちを取っても同じだと思う。

なら、少しでも勝つ可能性が上がるほうにやるのが一番いいはずだ。

まあ、やはり前衛の方が怪我也増えると言うのは正直怖いが。

「じゃあ俺は強化を取るよ。少し考えたけどそれが一番良いと思う。」

わかった。そう言って頷くリオン。

「じゃあ、練習を始める。まず、強化の基本の自己強化から。これはさっきも言ったとおり、筋力や、俊敏性の上昇。衝撃を緩和したり、攻撃から身を守る……。そんな効果がある。これは前衛にとってもっとも大事な事だから使えるようになっていたほうがいい。」

確かに俺は武器がなくても何とか戦えるから、怪我をしにくくなったり筋力が上がったたりすると大いに助かる。

「分かった・・・けど、どうやってやるんだ？まずそこから教えてもらわないと。朝からなんとなく霊力を弄っていたら多く出すとか、少なくするとかはまあまあ出来るようにはなっただけど・・・。やっぱり本格的なものは見本があったほうがいいと思う。リオンは自己強化できるのか？いや、無理なら無理でもいいんだけど・・・。」

「やっぱりリオンは収束らしいから無理かもしれないけどな。出来るなら手本を見せて欲しい。やっぱり」

「手本があるほうがいいしな。ほら、野球とかでもただ本とかを見て覚えるより実際やっているところを見たほうがやりやすいだろ？」

「一応・・・出来る。」

「出来るのか？収束の方だから出来ないかと思っただけだな。」

「俺がそう言うとりオンは首をぶるぶると可愛らしく振り、答えた。」

「別に、収束は強化を出来なくて、強化は収束を出来ないというわけじゃない。ただ、収束を選んだ人は、強化を扱いにくくなる。つまり、基本の自己強化しか行えず、更にそれにも強化系の何倍もの霊力を使用する。霊力とは文字通り霊の力。力と言う物には必ず限界がある。それは力の中でほぼ最強を誇る霊力といえども例外じゃない。だから、収束系の人は強化をあまり使わない。元々収束系は魔力を大量に消費するタイプだから・・・。」

フムフム。つまり一度決めちまったら他のは使いにくくなるって事かな？

簡単な説明にしたら『魔法使い以外が魔法を使えばMPを倍消費します。』みたいな感じかな？

つまりリオンは強化を使えるけど、そんな事するなら霊力弾を増やしたほうがいいって事か……。

「まあ、つまりは適正の問題。収束には強化の適性はなく、その逆も叱り。」

ほほう……。まあ、使えるのなら良かった。リオンには悪いけど、見せてもらうことにしよう。

「じゃあ、すまないが見せてくれ。一回でいいから。」

一回で良いと言つのは昔武術を習った人が、この霊力に似た気とか言うものを使っていたからだ。

その時、なんか気の流れを見ろっ！みたいな事を言われて、やらされていたからそう言う力の流れを見る……。とかはわりかし得意だ。あと、リオンに負担を掛けたくないしな。

「分かった。じゃあ、良く見ていて。」

「おう。」

短く答え、意識を集中する。リオンの霊力を凝視する。些細なことでも見逃さないように。

・・・・・・・・ん？おお、変化し始めた。

フム。そんな風にしたら身体強化が出来るのか。霊力って不思議だな。

「出来た。私は少し時間が掛かるけど、強化を選んだ人なら慣れたら一秒程で出来るようになる。で、強化したらこんなことが出来る。」

そう言つて隅の方に立て掛けてあつた木刀を持つて来る。

そしてそれを・・・・片手で折つた！？

うわ・・・・。あんなスプーン曲げ見たいに折れるなんて・・・・。これで適性が無いとか・・・・。

マテ、適性の高いやつがつかつたらどうなるんだろうか？辺り一帯クレーターだらけになるんじゃないかな？

ふう。いかにいかん。思考がそれだ。

さて。強化だが、強化方法は霊力を体に纏つて使うのではなく、霊力を取り込んで体の内側から強化するって感じだったな。

俺が見ていた限りでは、リオンの纏う霊力がいきなり増え、それからすぐに減つて行つた。

そこを良く観察したらリオンの体に霊力が取り込まれていつている

のが分かった。

更に言うと普通は体から離れていくはずの霊力が離れずにとどまっていた。

その後纏う霊力の量は普段と変わらなかったが・・・なんて言うんだろ？纏う霊力は同じ量。更に体にもなんら変化は無いのに、そう。自分ではリオンには絶対に勝てない。

そう実感した。

俺の持つ体術や武器。それこそ重火器を使っても傷一つ付けられない。そう思った。

・・・こんな奴らの戦いつてどんなだろうな？

「・・・じゃあ、神哉もやってみて。やり方は分かったでしょ？」

「え？あ、ああ。分かった。」

・・・少しボーっとしていたみたいだ。声をかけられてびっくりした。

まあ、やり方は分かったしな。やってみるだけやってみるか。

よし、まずは纏う霊力を増やす。・・・よし、できた。これは朝から暇つぶしでやっていたことだから簡単に出来た。暇つぶしでやったことが役に立つなんてね。

そして、取り込む・・・？

?!取り込むってどうすればいいんだ？

良く分かんが・・・とにかく、何事にもイメージって大切だよな。
とにかくイメージしてみる。目をつぶって、瞑想をするときみたいに集中する。

そして、自分の体に霊力が取り込まれて行く光景をイメージする。

イメージ・・・イメージ・・・。

・・・

・・・

「・・・ふう。難しいな。まあ、一回で成功するわけでもないか・・・。」

はあ、やっぱり無理か。イメージって言ってもなあ・・・。結構難しいもんだ。

「いや」

「へ？」

急にリオンが俺の近くに来た。

「いや、失敗してない……。すごく弱いけど、成功してる……。」

「え？本当か？え、いや、まじで？」

ものすごく動揺しながらもリオンが折った木刀をもち、力を込める。
……。

バキィ

「うおっ！？」

折れた……。簡単に折れた。いや、強化なしでも折ることは出来たけど。

でもこんなに簡単には折れなかった。もっと本気で力を込めないと。
……。

改めて実感する。少し成功しただけでこれかよ……。

うわぁ。一回死んで生き返ったってだけで妖怪みたいなものののに。
……。

俺は今よりも強くなれるのかな？いや、強くならなくちゃいけない

な。

それこそ、化け物と呼ばれるくらいに。

待ってやがれ糞神様。いつか絶対、お前達をブチコロシテヤル。

絶対に・・・。

霊力の使役。収束系と強化系。（後書き）

中々バトルが掛けませんね……。まあ、バトルを書くのは下手だ
けどさ……。。

まあ、頑張らないとね！

感想をくれると作者が喜びます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3550w/>

神なんて嫌いだ。

2011年10月27日03時03分発行